

ワークショップ報告書

「マレー世界におけるカトリック教会とエスニシティ：ジャワ・華人移民・マレー語」

[文責] 織田悠雅（地域研究専攻博士後期課程1年）

本稿では、2024年11月23日に上智大学図書館にて開催したワークショップ「マレー世界におけるカトリック教会とエスニシティ：ジャワ・華人移民・マレー語」について報告する。昨年も同様のメンバーでワークショップを開催し、前回はインドネシアのみを対象として、カトリック教会とナショナリズムの関係について考察を行った。今回は対象地域を拡大し、マレーシアとインドネシアを中心としたマレー世界のカトリック教会について扱うこととした。

本ワークショップは、「マレー世界のカトリック教会研究」を打ち出し、この枠組みを活性化させることを目的として企画・開催された。インドネシア・ジャワ地方のカトリック教会に関して研究を行ってきた企画者は、これまでの研究活動の中で、「マレー世界の宗教研究」においてはカトリック教会が、「現代カトリック教会と社会をめぐる研究」においてはマレー世界に注目が集まっていないことに課題意識を持っていた。そこで、マレー世界におけるカトリック教会のあり方を提示し、「現代カトリック教会と社会をめぐる研究」の深化につなげたいという思いで今回のワークショップを企画し、開催に至った。

まず、第一報告者の李光平（グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻博士前期課程2年）からは、「マレー語でカトリックを实践すること：サバ州内陸部のマレー語キリスト教世界」というタイトルで、マレーシアにおけるカトリック教会と言語の関係について報告が行われた。李は、マレーシア・サバ州内陸部のカトリック教会の宗教実践における、国語であるマレー語と民族語であるカダザンドゥスン語の使い分けについての考察を行い、さらに、使用する場面が縮小する民族語の保存に対して教会がどのような役割を果たしているのかについて報告した。

次に、柴山元（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士一貫課程5年）が、「台湾におけるカトリック・インドネシア移民のコミュニティ」について発表した。柴山は、台湾での長期現地調査直後の発表ということもあり、報告には現地調査の成果がふんだんに盛り込まれていた。内容としては、台湾におけるカトリックのインドネシア語共同体（2箇所）の設立に携わったインドネシア人神父の語りを中心に、インドネシア語

カトリック共同体が移民コミュニティの1つとして果たしてきた役割についての考察であった。

最後に、織田悠雅（グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻博士後期課程1年）が「ジャワ社会におけるカトリック巡礼地形成史」というタイトルで、ジャワのカトリック教会で活発に行われている宗教実践として巡礼を取り上げ、そのカトリック巡礼地の形成史において表象されるジャワ文化について検討した。とくに、宣教初期の1920年代に設立された2つの巡礼地に焦点を当て、ジャワ文化がどのように取り入れられ、誰が関与し、その取り入れ方や証憑の在り方がその後の巡礼地建設においてどのように再生産されていくことになったのかについて報告した。

これらの発表を受けて、コメンテーターとして呼び出した川田牧人氏（成城大学文芸学部教授）がそれぞれの発表に対してコメントを与えた。その際、川田氏はフィリピン・カトリック教会を対象として行った自身の研究を踏まえ、カトリック教会とエスニシティを考察するうえでの必要となる鍵概念を提示し、それを3人の発表内容に関連させながらそれぞれの発表にコメントを与えた。川田氏は鍵概念として、シンクレティズム論、インカルチュレーションと土着化（indigenization）、ヴァナキュラー宗教の3つを提示し、この鍵概念は、ワークショップ全体としてカトリック教会を扱ったことの意義を鮮明にし、扱う地域や民族が異なる今回の3発表を議論するための土台となった。また、それぞれの発表に対する質問やコメントは、発表内容をどのように大きな議論に接続していくのかという点に重きが置かれており、3人の発表者それぞれの今後の研究活動に大いに参考になり、また励みになるものであった。

参加者に目を向けると、本ワークショップの参加者は延べ10人程度とそれほど多くなかったが、東南アジアのカトリック研究や宗教研究に携わる研究者の方々が中心に参加され、各発表後の質疑応答の時間には発表の核心を突き議論を深める質問がいくつも飛び出し、とても意義深い時間を過ごすことができた。

今回のワークショップでは、マレー世界のカトリック教会を扱うことで、マレー世界のエスニシティ、ナショナリズム、移民とアイデンティティに対して新たな視点を提示することができた。マレー世界のカトリック教会研究の活性化にはさらなる研究活動・発信が必要であるが、今後も同様の研究成果発信の取り組みに邁進することで、目標の実現につなげたい。